

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 179



1986 OCTOBER

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

〈登山隊々員募集〉

—— 未踏のロマンを求めて ——

ラブチェ・カン (7,367m) 登山隊

こつこつと積み重ねてきたHAJの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、1987年秋にチベットの未踏峰ラブチェ・カンをチベット登山協会と合同で登山することになりました。この山はヒマラヤ登山の大先輩であるE・シプトンがメンルンツェ偵察(1951年)の折りの報告で「その先のチベット高原の彼方に人跡未踏のラブチェ・カン連峰の山々が望まれた」と記しているとおお7,000m峰数座を含む未知の山群の主峰です。合同登山の主旨を理解されて積極的にご応募下さい。

1. 目標の山 チベット自治区 ラブチェ・カン
(拉不及康峰・Lapche Kang 7,367m)
2. 時 期 1987年9月～11月(75日間程度)
3. 募集隊員 10名

4. 個人負担金 120万円
 5. 隊員資格 ①HAJ会員であること ②個人負担金を納入でき準備に参加できる者 ③登山技術・体力・健康状態・協調性など合同登山の主旨に合致する者
- ラブチェ・カン周辺図

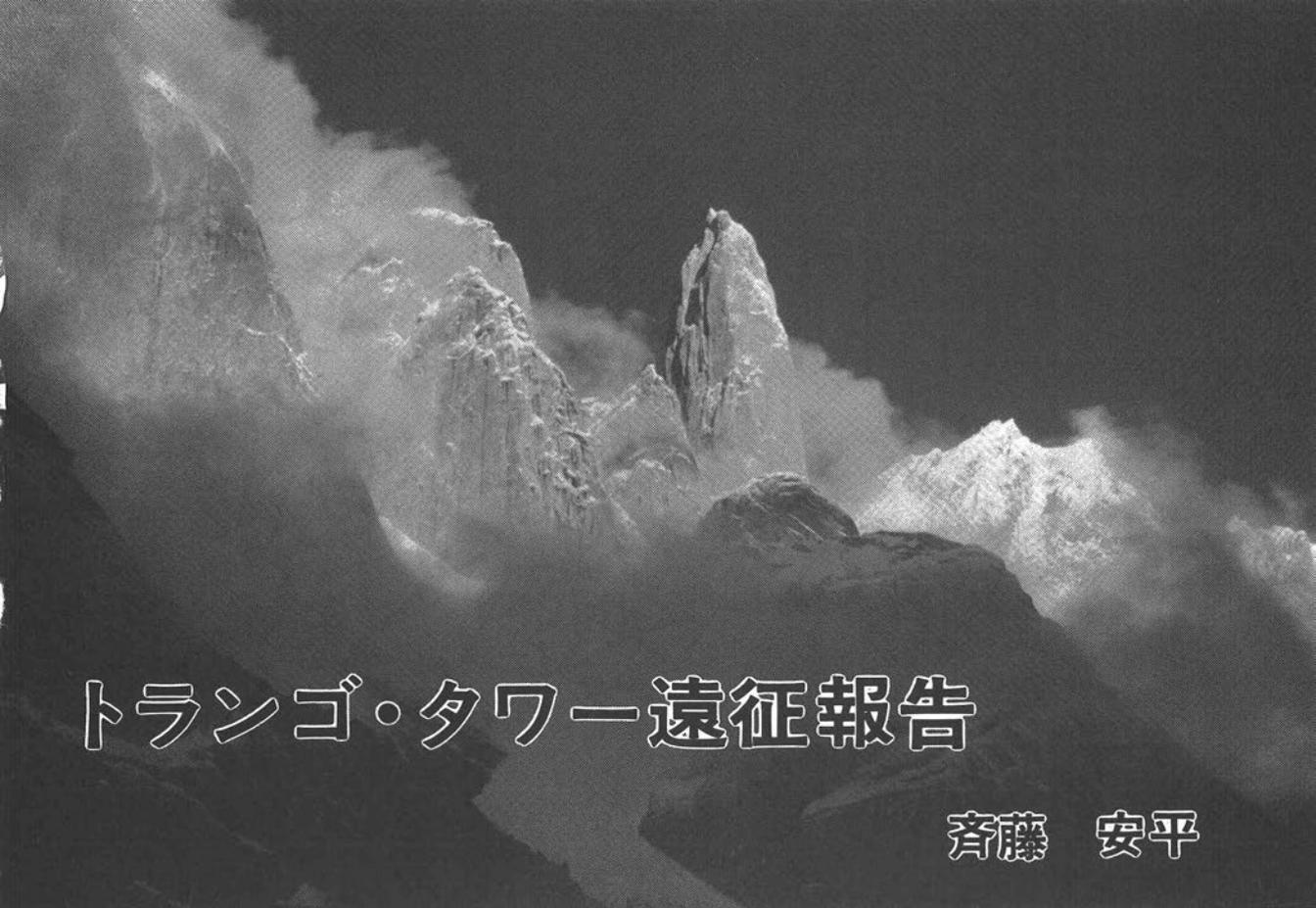


表紙写真

バルトロ氷河の支流デュング氷河を溯ってゆくと、右手にはキャシードラルからピアールの峰々が、そして左手にはトランゴ岩塔群の峰々が、飽きさせることなく次々と姿を見せ、やがて目ざすトランゴ・タワーがその全容を現わした。
(吉田憲司)

ヒマラヤ No.179

1. トランゴ・タワー遠征報告 ————— 斎藤安平
8. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
12. 乔烏衣登山計画 ————— CHO-AUI 1986
16. 神領の峰へ ————— KARJIANG 1986
20. 加拉白里登山計画 ————— GYALA PERI 1986
24. 寸感・事務局日誌



トランゴ・タワー遠征報告

齊藤 安平

▲ベースキャンプからのトランゴ・タワー（南東面）

1985年7月、K2の登頂に成功した山田と吉田は、ポーランドの登山家ヴォイテク・クルティカと知り合った。彼らがK2のベースキャンプで共通の時間を過し、ヒマラヤ登山を語り合ううちに、日・ポ合同でのトランゴ・タワーへの計画が生まれた。当初、ポーランド、日本それぞれ2名ずつということであったが、クルティカはパートナーを見つけることが出来ず、日本から3名ということになり、齊藤が参加することになった。このメンバーの不均衡が今回の遠征の失敗となる大きな原因であった。

ポーランドからは食糧と装備の一部、日本側が外貨を負担する。何度かの手紙とテレックスのやりとりで計画はすすみ、7月19日、4人がイスラマバードに集まった。

しかし、今まで友好的に進めてきた計画も、イスラマバードでの実際の作業が始まると、クルティカと我々の間には少しずつ溝ができていくのが感じられた。我々のする事は彼にとって全てが気にいらず、全ての作業が彼の主導でなければ気が

すまない様だった。

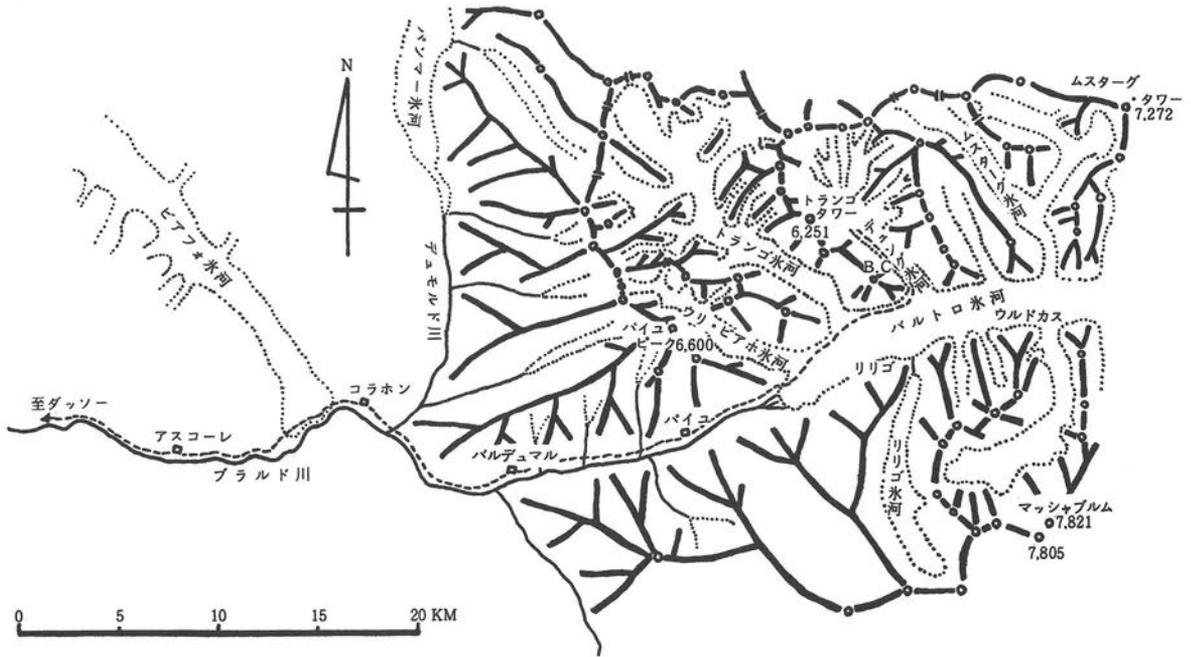
5月25日夜、チャーターバスでスカルドへ向う。インダス川に沿ってバスは走り続け、26日夜、K2モーターに入る。ドライバーの疲れ切った顔が思い出される。

翌日は、若干の食糧の買い出しとポーターの雇用に費す。

ポーターは、ダッソー迄のトラクター代を要求し、ヘルリッヒ・コッファーのK2隊はそれを出してくれたと言う。我々はそんな余分な金は払いたくないし、こんな前例をつくると、「日本人のお陰で我々は大変迷惑した」と外国隊に言われそうである。彼らは都合の悪い事は日本人のせいにしておけばいいと思っている。

拒否されたポーターは帰ってしまったが、夕方になって再び集まってきた。そして今度は靴の支給でもめ始めた。我々は金で支給する予定であったが、金額が折り合わず、彼らは再び帰ってしまい、今度は戻ってこなかった。しかたなくコックにポーターを呼びに行かせ、要求通り40ルピーを

トランゴ・タワー概念図



支払うことにした。

ポーター代も値上りしており、ダッソー～アスコレ間が、日当50ルピー、帰路手当15ルピー、食費15ルピー。アスコレ以降は、日当60ルピー、帰路手当25ルピー、食費15ルピーで、休養日は日当の半額と食費となっていた。

また、スカルド～ダッソー間の輸送費は、トラクター 700 ルピー、小型ジープが 624 ルピーであった。

28日、朝早く荷物を乗せたトラクターが出て行った。我々も、6時、ジープに乗って出発する。途中ジープが故障したり、砂嵐に遭ったり、雨に降られたりしながら、ダッソーのゲストハウスに入る。荷物を整理すると、32個になった。スカルドで雇ったポーター30人に加えここで2人雇う。

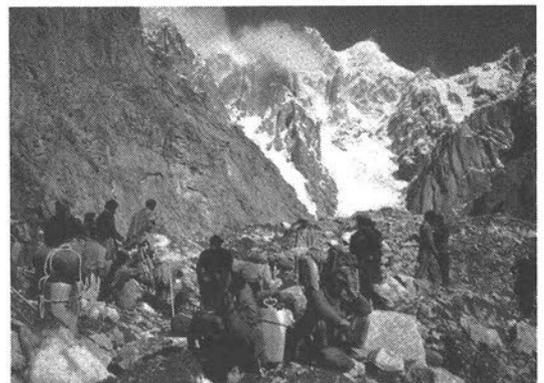
29日、ダッソー～チャボの対岸。30日、チャボの対岸～チョンゴ。そして31日、最後の部落であるアスコレ到着。ここでは、ポーターのためのアタを買い、それ用のポーターを1人雇用する。この村長のハジ・マハディンはかなり有力者だそうで、11年前、山田がラトック一周のトレッキングに来た時から、この街道の顔役だったそう

だ。

普通、ここで羊を買ってポーターに支給するのであるが、我々はしらばっくれる。結局、ベースキャンプで肉代として1人5ルピー支払った。

6月1日。ポーターの1人が勝手に帰ってしまい出発が遅れる。彼は替りのポーターを用意して行ったのだが、それが遅くなったためである。クルティカは、今年はポーターのトラブルが多すぎると気げんが悪いが、我々にとって、30人や40人のポーターは全然問題無いのである。

ビアフォ氷河を横切り、ドゥモルド川を渡渉する。今年は寒いため雪どけが遅く、水量が少ない



▲ウリ・ビアホ氷河出合で休むポーター



▲トランゴ岩塔群

そうである。水は非常に冷たかった。バルデュマル泊。

2日、今日の泊場はパイユ。遠くからでもそれとわかる林がある。砂と瓦礫、そして岩山ばかりの中をキャラバンして林に出会うと、ほんとうに安心する。

パイユには先行しているヘルリッヒ・コッファーのK2隊に追つく。今日は休養日だそうで、先日イスラマバードで会った、ポーランドのククチカ氏とベオトルフスキー氏がテントも張らずに寝ていた。彼らをお茶に呼び話す。彼らのキャラバンも大変だったそうで、ダッソーでは、ポーターが集まらず隊を2つに分けようとしたところ、連絡官に「隊員は常に行動を共にしなければいけない」といわれ往生したそうだ。又、何も事情のわからないポーランドの2人がカラチの通関に行き、最初にあげたカートンが全てビールだったとか、いろいろとおもしろい話を聞かせてくれた。吉田は、ヒマラヤ放談のインタビューを始める。ベオトルフスキー氏が、プトレー大岩稜の冬期初登攀者だという事を聞きおどろく。彼にパキстанは好きかと聞くと「こんなとこ好きな奴がいるか」

といていた。

3日、パイユから、ピアホ氷河、トランゴ氷河を渡り、グレート・トランゴの下で泊まる。

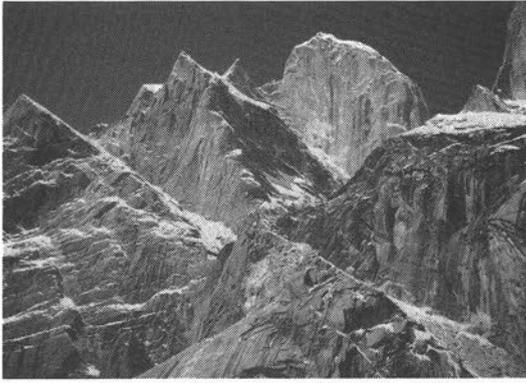
4日、キャンプ地から2時間程でデュング氷河の出合。クルティカは、氷河を渡った後、左岸を溯ってベースキャンプを張ると言って先に行ってしまった。ところがポーターは右岸の踏跡に沿って進み、2時間程溯ったところにあるイタリア隊のベースキャンプに着いてしまった。ここは快適な砂地で、イタリア隊はすでに登山活動を開始していた。

やがてクルティカもやってきて、しばらく文句を言っていたが、結局ここをベースキャンプにすることになった。

吉田と連絡官がポーターへの支払いをしている間に、4人でテントを張る。クルティカがポーランドから持ってきた大きな食堂テント、それとエスパーステント3張のベースキャンプが出来上った。

5日、イタリア隊の話では、ここ数日天気は良くないそうだ。午後雪が降り出した。この高さで雪が降るのはめずらしいそうだ。

6日、午前中の天気の良い間にと、4人で偵察



▲グレート・トランゴ 東面の壁

に行く。氷河を1時間半ほど溯ると、トランゴ・タワー東面の全容が見えてくる。写真で見た程大きくない。壁の取付までは、雪のクローアールが1,000メートル程続いている。双眼鏡で見ると、赤いきれいな岩で、クラックも縦にたくさん走っている。雪のついたテラスも随所に見える。しかし頂上直下の岩壁には弱点は見い出せなかった。

さらに氷河を溯ると、北稜が見えてくる。こちらは傾斜もゆるく登り易そうだが、灰色の岩で氷が張っている様だ。

私は北稜を主張してみたが、英語で議論しても勝てるわけもなく、ルートは南東面をとることになった。

やがてガスが出てきてトランゴ・タワーを包んでしまった。ベースキャンプへ戻り昼食にする。

7日、明日から登攀を開始することにし、食糧、登攀具のパッキングにかかる。

台座の上の雪のバンドまでロープを固定し、いったん下って休養してから頂上まで一気に登る予定で、台座の上まで4日間、頂上までを9日間として食糧を決める。しかし、クルティカと我々の意見が合わず、どれだけの食糧を持っていくか決められない。結局、最初の4日分を持って行って試してみることにする。

夕方、くじ引きで、パートナーを決める。山田—クルティカがルート工作、斉藤—吉田が壁の基部までの荷上げとなった。

8日、それぞれ25キロの荷を担いで出発する。予定より出発が遅くなってしまったため、クローアールにはもう陽があたっており、雪がぐさり始めていた。膝までのラッセルと、重荷のためピッ

チは上がらない。

今回の目的のひとつに、ヨーロッパの一流ヒマラヤニストはどのくらいのものなのか見てやろうと思っていたが、彼はそんなに強くはない。我々は彼と対等にやっていると感じるを受けた。山田などは彼より強いと思われる。彼らと我々の違いは、山に登る以前にある様な気がした。

クローアールを抜け、広い雪面に出た時、稜線から小さな雪崩が出た。それはしだいに大きくなり、ラストを歩いていた吉田をもう少しで巻き込むところであった。

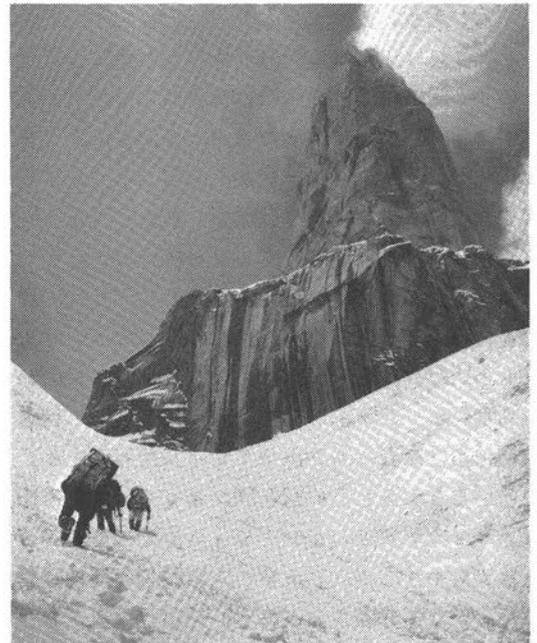
トランゴ・タワーの基部から右へ伸びている稜線直下をキャンプ地にし、テラスを削る。少しせまいが、3~4日滞在するには問題ないだろう。

15時、明日からルート工作をする山田とクルティカを残し、吉田と2人でベースキャンプへ降りる。

9日、この日、山田とクルティカは、3ピッチルートを伸ばした。ほとんどフレンズやスライダーを使っての人工だったそうで、浮石の多いのに苦労したようだ。

吉田と私は休養日。昼すぎ山田達の登っているのを見に行く。台座の右端に登っているのが見えた。

10日、今日は陽があたる前にクローアールを登ってきたので快適に進む。前回の3分の2位の時



▲クローワールの荷上げ

間でキャンプ地に着いた。

山田に声を掛けると、今日中に台座を抜ける
のこと。テント場を広げて彼らの登るのを眺める。
14時ごろ岩壁の終了点に着き降り始めた。キャン
プ地に着いたクルティカは、吉田に細かい指示を
与えた後、山田とベースキャンプへ降りていった。

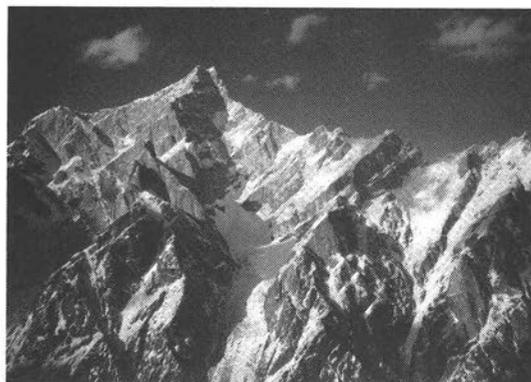
11日、6時半、登攀具、ロープ等の荷上げに向
う。天気は下り坂のようで、低く雲がちこめ、
対岸のピアレの頂上は雲の中である。

吊り上げをするほどでもないの、荷を担いだ
ままユマーリングする。4P目を登り出すところ
から雪が降り始めてきた、湿った雪で、ビショぬれ
になってしまう。

今日は、上部岩壁の取付までルートを伸ばして
おく予定であったが、ロープの終点まで荷上げし
て下る事にする。もたもたしていると、雪崩の危
険でクーロアルが降りられなくなりそうだ。

キャンプ地のツェルトをたたんだり、荷物と整
理したりしてクーロアルをかけ降りる。下は雨
が降っていた。

12日、明け方、コックが「パニ、パニ」を騒ぐ
のでテントから顔を出すと、テントのまわりが水
びたしになっていた。岩壁を伝ってどンドン水が
流れこんでくる。いそいで私物をコンテナに入れ
排水溝をほる。しかし水の抜け口がないので水は



▲ピアレ(6,729m)西壁

たまる一方である。どうも我々のテント場は、大
雨の降った時に運ばれた砂がたまってできたもの
らしい。

9時ごろ、水の流れ込むのが止み、いったん水
は引いて行ったが、2時間もするとまた水が流れ
出し、テント場は完全に水没してしまった。しか
たなく、テント場をサイドモレーンの上に移動
し、食堂テントとエスペース2張を張る。

13日～18日、停滞、天気は快方に向っており、
明後日、出発とする。

19日、快晴である。食糧、登攀具の梱包をし
て明朝に備える。1人10キロくらいになった。
昨日まで落ちていた雪崩も今日はやみ、静かであ
る。



▲トランゴ・タワー、台座の荷上げ

20日、2時、クルティカに起こされる。テントから出ると満天の星である。簡単な朝食の後ヘッドランプをつけて出発。

クーロアールの取付に着くころには明るくなってきた。締った雪にアイゼンを効かせ、一気にクーロアールを登る。7時半、キャンプ地着。雪に埋ったツェルトや、登攀具を掘りおこし、吉田、クルティカが先行する。

荷上げの山田と私もしばらくして後を追う。取付で、25キロのフォールバック2個、10キロのザック1個に分けて、吊り上げを始める。簡単にいくと思っていたが、傾斜がゆるくなかなか思う様に上がらない。最後のピッチでは、迎えに来てくれた吉田に手伝ってもらい、20時半、ようやく岩壁の上に荷物を引き上げることができた。

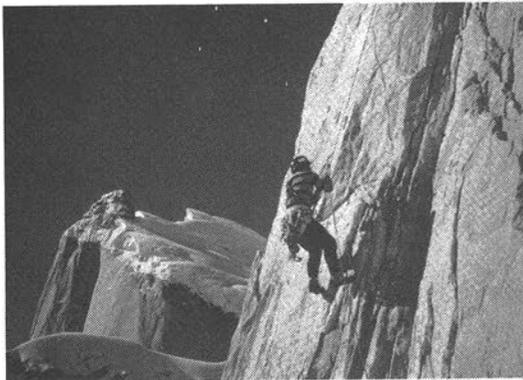
上部岩壁の取付までは、120メートル程雪壁が続いており、ロープが張ってあった。今夜ビバークに必要なものだけ持って登る。

キャンプ地には小さなテラスが2つ作ってあった。ツェルトを張り、吉田とクルティカ、山田と私の2手に別れて入る。

21日、朝早くから陽があたり始め、ゆっくり寝ていることができなかった。昨日の疲れで体が重い。

山田と私で、昨日残してきた荷物を取りに行く。吉田、クルティカはルート工作に向い、11時ごろ登り始めた。

1ピッチ目はホールドも多く傾斜もゆるい。吉田は快調に登っていたが、やがて人工登攀になる。大きなオーバーハングを越えたところで今日の登攀を終え下降してきた。



▲ユマーリング

22日、今日は、山田と私でルート工作に出る。昨日の終了点でクラックは無くなり、次のクラックが5メートル程右の方にある。初めフリーで行こうとしたが行けず、ボルト2本を打つ。

ヘアーラインクラックが10メートル程続いており、ナイフプレートタイオフの連続で登る。クルティカの“Aピトン”はこういうクラックに大変有効だった。

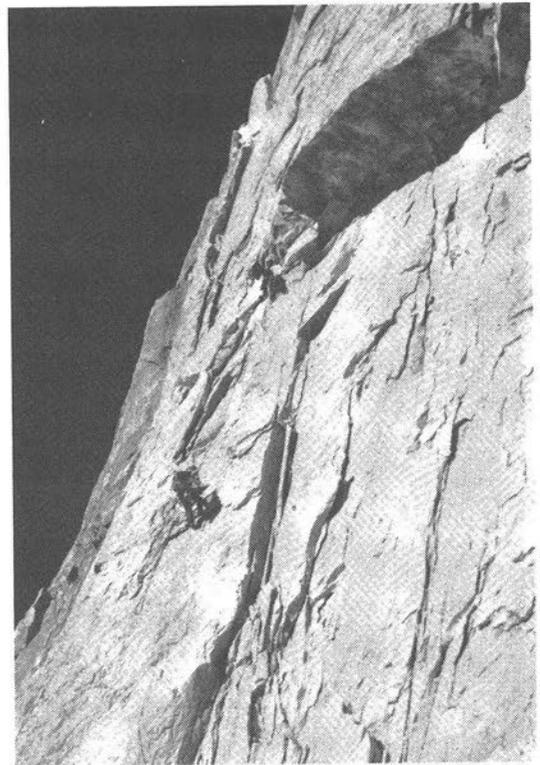
やがてクラックも広くなり、ストッパーが使える様になる。クラックとジェードルのラインに沿って、フリーと人工で登り続ける。岩はしっかりしており、昔、シャモニの岩を登っていたころを思い出す。

写真でもはっきりとわかる大ジェードルの1ピッチ下まで登り下降。

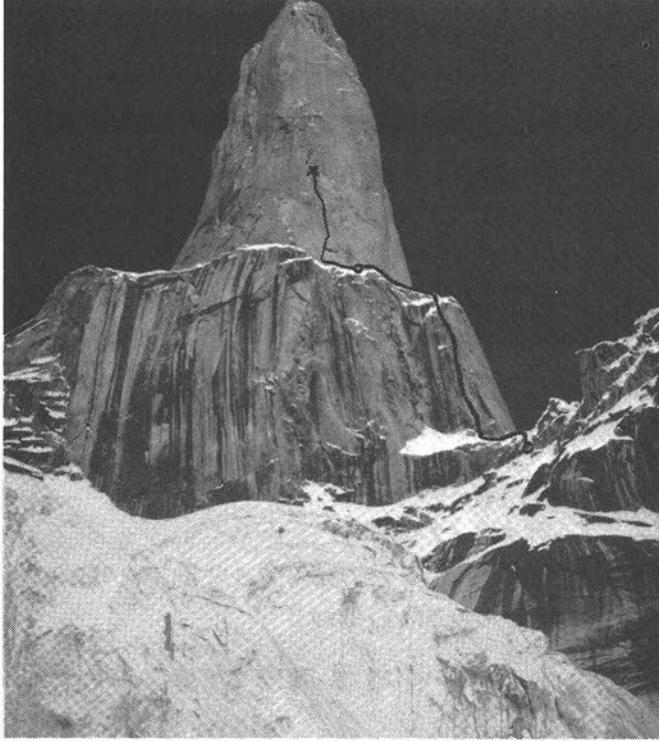
23日、吉田とクルティカは朝早く出て行った。9時ごろ、昨日の終了点よりクルティカが登り始める。

山田と私は彼らの登るのを眺めながら、この遠征について話しあう。

我々とクルティカの関係は、非常に悪くなって



▲タワーの登攀



▲台座と岩塔の登攀ルート

- ……キャンプ地
×……最高到達点



▲氷雪クーロワールの登攀ルート

きており、特に20日の夜以来ほとんど口を聞いていない。彼といっしょにすることが苦痛にすらなっていてきており、こんな状態で登攀を続けることは我々の望むところではない。結局降りようということになった。その旨吉田に知らせ、クルティカに話してもらおう。いやな役を彼に押しつけた様で申し分けない。

しばらく吉田とクルティカのやりとりが聞こえていたが、やがて登攀具を回収して降り始めた。我々も今日中に降りるべく撤収を始める。

14時、撤収を終え4人で下り始める。雪壁を2回、岩壁を100メートル2回のアブサイレンで下る。荷下げも、ザックが引っかかったりして時間をくいの。19時ようやく基部に降り立った。

キャンプ地のデポ品を回収したりしているうちに暗くなり、真暗な中クーロアールを下る。

24日、朝方からトランゴの頂上から雲が流れ始めた。そして昼過ぎから強い風と共に雨が降り出した。

25日、我々はポーターに7月7日に来る様手配してあったが、待っていてもしかたないので、吉

田と連絡官に先に下りてもらってポーターの手配をたのむことにした。連絡官は帰ることになってうれしそうだった。

25日～27日、悪天は3日間続いた。グレート・トランゴの南にある無名峰に登りに来ていた西ドイツの3人も、この悪天のため敗退してきていた。

28日の夕方、11人のポーターが登ってきた。予定より1日早く来たので助かる。

29日、11人のポーターと共にベースキャンプを後にする。なぜか敗退のくやしさはなく、かえってほっとした様な気持ちである。そして秋の遠征への情熱がわき上がってくる様であった。

日本・ポーランド合同カラコルム登山隊1986

メンバー ヴォイテク・クルティカ (39)

山田 昇 (36)

斉藤安平 (33)

吉田憲司 (33)

連絡官 Maj. ムハマッド・サイド (33)

地域ニュース

《ネパール》

エベレストへ平和の灯

世界最高峰サガルマータ(エベレスト、8,848m)のてっぺんまで平和の灯(トーチ)をリレーで運びあげよう、と云うユニークな国際登山隊がこの秋カトマンズから出発する。

この登山隊は、国際平和年を記念して国連が後援する「平和のための地球走破(アース・ラン)」の一環として実施されるもので、米国、英国、カナダ、西独、ネパール、中国の6ヶ国32人の登山家が参加する。

「地球走破」は、9月16日、ニューヨークの国連本部前をスタートして、12月11日まで、45ヶ国のランナー約10億人が次々と平和の灯をリレーすると云う。トーチはカトマンズ経由でサガルマータ山麓まで運ばれ、そこから登山隊にバトンタッチされる。山頂にトーチが到着するのは、天候が安定するポスト・モンスーン期(10月~11月)になる。

ポスト期の登山隊

ネパール観光省は8月11日、ポスト・モンスーン期のネパール・ヒマラヤ入山状況を発表した。

発表によると、53隊が33峰へ挑む。国別ではフランス隊の9隊が最も多く、次いで韓国隊の8隊となっている。日本隊は以下の通り。

• チョー・オー (8,201m)

北九州ヒマラヤ同人隊(白石宣夫隊長以下12名)は、ゴジュンバ氷河から1983年の福岡登山研究会と同じルートを経てチョー・オーに挑む。

• ヒマルチュリ (7,893m)

日本大学隊(岡田貞夫隊長以下8名)は、1981年秋の再挑戦として、ドルディ・コーラから南稜に挑む。

• ティリッツォ・ヒマール (7,134m)

泉州山岳会隊(翁長和幸隊長以下6名)は、北面のティリッツォ・パス側から挑む。

• チャムラン (7,319m)

酪農学園大学山の会隊(新谷暁生隊長以下14名)は、西面から西稜に挑む。

• トリプラ・ヒウンチュリ (ハンギング・グレッシャー・ピーク, 6,553m)

岡山大学ネパール・ヒマラヤ学術登山隊(田中源三郎隊長以下8名)は、北西稜からの登頂を目指す。登山終了後はダウラギリ山群の西面・北面を踏査の予定。

• プモリ (7,145m)

龍鳳登高会隊(高品公平隊長以下6名)は、北東稜からの登頂を目指す。

《パキスタン》

K₂で事故相次ぐ

今年のK₂には11隊もの登山隊が挑むと云う盛況振りであったが、悪天候などにより遭難が相次ぎ12名が死亡した。

• 南稜に挑んでいたアメリカ隊(9人)はジョン・スモリッチ隊長(35)とアラン・ベントン隊員(34)の2人が、6月21日、6,000m付近で雪崩に遭い死亡した。

• 同じ6月下旬に、フランス隊(4人)のモーリス・バラード隊長と同夫人の2人が登頂に成功した後、行方不明となった。

• 南壁からポーランドのイェジ・ククチカと挑んでいたタデウス・ペオトルフスキーは、7月8日に登頂に成功した後、10日、下山中に滑落死した。

• 7月16日にはイタリアのレナト・カサロット(39)が単独でアタックして途中断念となり、下山中にクレバスに転落死亡した。

• さらに8月に入って、欧州合同隊で6名もの大量遭難事故が発生した。8月4日、登頂に成功した欧州合同隊の8人は、下山途中の翌5日、7,925m地点で猛吹雪に遭い、2日後、英国人女性のジュリー・チュリスさん(47)が凍死。さらにポーランド人2人が滑落死、オーストリア人2人が飢えと酸素不足でそれぞれ死亡した。さらに死亡説の高まっていた英国のアラン・ラウス氏(35)も18日、英国大使館筋から死亡が明らかにされた。

《インド》

シアチュン氷河問題で印パ会談

6月10日～12日にニューデリーで印パ国防次官会談が開かれ、シアチュン氷河問題に関連して協議が行なわれた。

印パ双方は13日共同声明を発表し、次期会議を適当な時期にイスラマバードで聞くことを明らかにした。同声明によると、会談は友好的な雰囲気で行なわれ、双方はシムラ協定に基づく交渉による解決を模索することで合意した。ちなみに本問題に関する印パ協議は1986年1月にイスラマバードで開かれて以来2回目である。

(パーキスターン No91)

サセル・カンリⅢ(7,495m)初登頂

26名から成るITBP隊(S.P. Chamoli 隊長)は、8トンの隊荷をシャイヨーク河に沿って運び、4月26日に北シャクパ・クンチャン氷河の4,663m地点にB・Cを設営した。B・C迄はシャイヨーク河と途中の支氷河に17回もの渡渉を強いられた。

このB・Cから頂上迄は、全長35kmにも及ぶ長大なルートで途中にはクレバスのひどい氷河が横たわる。途中、幾つかの岩場と雪崩そうな地点に2,500mのフィックスを施した後、5月15日に6人の隊員が、70°もある氷壁の大きな障壁を越えて初登頂に成功した。其の後、2次(6名)、3次(4名)隊も相次いで登頂に成功し、26名中16名が頂上に立った。

彼らによるとサセル・カンリⅢの標高は7,771m(25,495フィート)との事。

ITBP隊はこれで、サセル・カンリのⅠ峰(1973)、Ⅱ峰(1985年)、Ⅲ峰の全ての初登頂をものにした。

帰路は、シャイヨーク河のマンダルタンからシャイヨーク村までの105kmをいかだで5日間で下った。

《中国》

自転車で青蔵高原

15人の男女からなる中国高原自転車運動科学調査隊がこのほど、ゴルムド(青海省)をたち、標高5,000m余のタングラ山脈で調査活動をはじめた。

一行は自転車で、4,767mの崑崙山口、5,010mの烽火山口、5,206mのタングラ山口など数10個所の関嶺を乗り越え、高所が人体に及ぼす影響や適応能力などを調べる。

こうした研究は中国では初めて。中国で将来行う高地スポーツ種目の選択、開発のための科学的データを得るのが狙いと云う。

雪宝頂に初登頂

HAJと中国四川省登山協会との合同による日中四川雪宝頂合同登山隊(日本側：遠藤登隊長以下10名)は、8月5日と6日の二回にわたり同峰の初登頂に成功した。

7月25日に日本を出発した一行は、北京から成都入りし、中国側隊員と合流した。成都での熱烈歓迎を受けた後、27日に成都を出発。当初の計画では成都から茂汶羌族自治州經由松藩入りする予定であったが、松藩への道路崩壊の為、西へ大きく迂回して紅源高原を通過して松藩へ向う。

松藩から1日のアプローチで7月30日、BC到着、BCは雪宝頂南西面の高度4,170mの地点に設営。

31日より登山活動を開始し、計画の通り南稜にルートを取る。4日に5,100mの地点にC1を設営し、5日朝6時50分に日本側メンバー4名(八木原、中岡、菅原、大金)でアタックし、8時13分に初登頂に成功した。翌6日には、第二次アタック隊として日本側4名(森山、福山、天城、三好)と中国側5名(張江援、揚久輝、玉馬特、王華山、李慶)が頂上に向い8時45分に登頂した。

同隊は登山活動終了後、8日にBCを撤収して往路を松藩に戻った。

其の後、黄竜寺や成都市内の観光を楽しんで、21日、JAL-782便で無事帰国した。

(尚、詳しい報告は次号でお届けします。)

トピックス

ネパールの自然保護団体
日本にも誕生

森林破壊の進むネパールの環境保全と自然保護運動に日本からも手を差しのべようと、7月24日、東京・六本木の国際文化会館で、ネパールに関係の深い大手企業や、自然保護団体の代表524人によるキング・マヘンドラ・トラスト日本国内委員会（委員長・大来佐武郎世界野生生物基金日本委員会会長）の設立式典が行われた。

ネパールは、人口増で耕作地拡大が進んでいるうえ、エネルギー資源がないことから森林破壊が進み、貴重な動植物の減少が問題となった。このため2年半前、民間団体「キング・マヘンドラ・トラスト」（会長・ギャネンドラ殿下＝ビレンドラ国王の弟）がつけられ、日本から大来氏のほか、英、米からも国際委員が加わり、エネルギー転換の開発、植林、野生動物の保護などのプロジェクトが計画されている。日本委員会は、大来氏を助けるほか、ネパールの自然保護についての研究、協力をめざして結成された。

式典には、メンバーの吉野照（清水建設）、本田茂（間組）、池田紀久男（日本工営）の各社長及び、沼田真（日本自然保護協会理事長）、大石武一（緑の地球防衛基金会長）らが出席。ギャネンドラ殿下が、「自然保護と経済の発展は相互に補うもの。ネパールでは、動植物だけではなく、人間さえも自然保護によって支えられている。」と、森林破壊によって起こる洪水で人命が失われていることなどを述べ、経済成長、科学技術で成功をおさめた日本の支援を求めた。ネパールには年約1万2千人が訪れて観光や登山を楽しんでいるが、ギャネンドラ殿下は「日本の登山団体はどここの国よりも多い。どんどん日本人の人に来てもらい、自然を傷つけないで楽しんでほしい。」と呼びかけていた。

大来委員長は、「水力発電など技術、開発援助、植林などどしどし協力したい。」と話した。

北大グループ、クチジロジカの調査へ
— 中国・青蔵高原に生息 —

中国・青蔵高原にしかいない貴重なシカ、クチジロジカ（白唇鹿）の本格的な生態、形態学調査が世界に先がけて、今年から5年がかりで、日本の北大グループ（代表・大泰司紀之助教授（45））と中国林業部の共同研究の形で行なわれることになった。

クチジロジカは進化の段階で、ニホンジカと欧米に広く生息するアカシカの間中に位置する種で、シカ属がどのように進化、発展してきたかのカギを握る重要な存在。世界のシカ専門家が“一番乗り”をめざしていたが、昨年の日中合同黄河源流探検隊（H A J 派遣、隊長・八木原聡明）に北大メンバーが参加したことをきっかけに中国側と具体化への交渉が始まり、長期調査が決まった。日本側メンバーは、8月4日に中国へ向った。

シカ属は、ルサジカからニホンジカ、クチジロジカ、アカシカの順に進化した。この中でクチジロジカは標高4,000 m以上の青蔵高原にしか生息しないため、これまで本格的な現地調査がされたことはなかった。

昨年5月から7月にかけて青蔵高原を訪れた日中合同黄河源流探検隊に学術隊員（動物担当）として参加した北大の梶光一さん（33）が、このクチジロジカのシカ場を偶然見つけ、貴重なデータを持ち帰った。この時の成果がきっかけで、大泰司助教授を中心とする北大グループは、中国側のいくつかの機関と接衝を開始、最終的に森林動物の研究を進めている林業部との間に研究合意書を取り交わした。文部省もこの研究目的を評価、科学研究費補助金の支出を決定している。

計画によると、青蔵高原の四川省西北部、青海省南東部、チベット自治区北東部を中心に6週間を分布域調査にあて、4週間を行動学と個体群動態学的調査にあてる。このあと、採取した標本調査を西安の中国林業部西北瀕危動物研究所で行い、10月末、帰国する。

この間、都市滞在日を除いては、すべてテント生活。日本から持ちこむ四輪駆動車2台を足として、広い範囲で調査に動きまわる予定。

メンバーは大森司、梶岡氏のほか、兵庫医大医学部の三浦慎吾助手（37）ら。

はじめてのクチジロジカ調査を前に、大森司助教授は、「とにかくシカをやってきた研究者なら取り組みたいテーマ。5年と云わず、10年がかりの長い研究テーマとしたい。」と意欲を語っている。

国際アルピニスト・シンポジウム

松本市、松本商工会議所など五団体の主催による国際アルピニストシンポジウムが8月20日～22日の3日間、松本市の音楽文化ホールで開催された。

このシンポジウムには8ヶ国から14名の山岳関係者が講師として参加された。外国人講師は以下の通り。

史占春（中国登山協会主席）、許競（同常務副主席）、アリ・ミルザ（パキスタン山岳会々長、UIAAアジア地域副会長）、ナジール・サビル（パキスタン山岳会々員）、N・D・ジャイヤール（インド登山財団副会長）、クマール・カドカ殿下（ネパール山岳協会々長）、テク・ポカレル（同事務局長）、S・R・シャルマ（同秘書）、チャールズ・ハウストン（アメリカ、医学博士）ロバート・シュニー（アメリカ山岳会々員、医学博士）、ノーマン・ハーディ（元ニュージーランド山岳会長）、アンセルム・ボー（フランス国立登山スキー学校教官）、趙相泰（ソウル山岳連盟理事）、金仁植（大韓山岳連盟専務理事）

シンポジウムは開会式の後、内外講師3名による特別、基調講演が行なわれた。

特別講演は、「日本の登頂史とマナスル登頂30周年」のテーマで日本山岳会々長の今西寿雄氏が、日本登山史を概観。マナスル初登頂時の苦労談や最近の登山スタイルと安全登山について語られた。

次いで、史占春氏より「中国登山30年の歴史」のテーマで特別講演が行なわれた。

ハーディ氏は「世界の自然保護について—カンチエンジュンガ登頂とその後」と題して基調講演。

カンチの初登頂とその後、10ヶ月ほどシェルバの村で現地生活した体験などをスライドを使って

紹介。ヒラリーのヒマラヤ財団が行っている医療・教育活動やネパールで進んでいる森林破壊の現状などにも触れられ、まとめとして「人間自身が環境を破壊していることを世界各地で見てきた。人口増加のコントロールや国土の保全にもっと配慮し、次代を担う子供達への教育も大切である。自然に対しては100年単位で物を考えていく必要がある、政治家の短期展望には失望を感じる。」と述べた。

第二日目は、特別講演の3としてハウストン氏が、「山に挑む医学—高山病が身体に与える影響」のテーマで肺水腫や脳浮腫などについて語られた。

次いでセッション1として「現代の登山—安全と教育」のテーマでフランス、日本、中国、インドの各講師によって述べられた。ボー氏は16ミリ映画でヨーロッパのエクストリウム・スキーを紹介された。

セッション2では、「世界各国の登山事情—現在の問題と将来の展望」のテーマで各講師が演壇に立った。最後にパネル・ディスカッションが行なわれたが、チェアー・マンの質問が余り適切なものではなかった。

第三日目は、日本の講師によって「山を次代へ—北アルプスの誕生と魅力」（田中邦雄氏）、「山を次代へ—21世紀の登山」（重廣恒夫氏）のテーマで講演が行われた。最後に記念講演として西堀栄三郎氏が「自然を語る」のテーマで講演し、3日間のシンポジウムの幕を閉じた。

折角のシンポジウムであったが、若い登山者の姿は少なかった。

インフォメーション

東京集会のお知らせ

9月の東京集会は、雪宝頂隊のスライド観賞を行ないたいと思います。

日時 9月29日（月）p.m. 7:00～

場所 HAJ ルーム

※61年度分会費の納入がまだな方は、早急にお願ひします。

乔鳥衣登山計画

— CHO-AUI 7,354 m —

趣 旨

日本ヒマラヤ協会は、広くヒマラヤの登山・自然科学・人文科学について研究・実践する会員数約700名を擁する全国規模の団体でありまして、これまで20年近くに亘ってインド、ネパール、パキスタン、ブータン、中国等に於いて活動を続けてまいりました。

これらの実績の上に、此の度、中華人民共和国のご好意により、現在では世界でも数少ない未登の高峰、チョー・アウィ峰（7,354 m）の登山許可を得ることができ、H A Jの宮城県在住の会員で登山隊を派遣することになりました。

この山域は、中華人民共和国とネパール王国の国境に位置しており、これまで両国からの入域許可が得られなかったところでもあります。それ故に、登山のみならず学術的にも関心の集まる場所となっており、その成果が期待されております。

此の度の登山隊は、仙台海外登山研究会で研究や実践を続けてきたH A J会員で組織されたものです。隊員は宮城県、岩手県の地元山岳会にも所属して、日頃の登山活動を行いながらヒマラヤへの夢を実現すべく励んできた熱心な勤労青年であり、この機会に社会教育面でも大いに経験を積めるものと期待しております。幸い、日中友好は最近、多面にわたって促進される傾向にあり、私たちは登山以外の分野でも寄与できるものと確信致

すものであります。

私たちは、この計画のもつ意義を理解し、実直かつ全力をあげてこの実現に努力致す所存であります。

何卒、この趣旨をご理解いただきまして、ご支援・ご協力を下さいますようお願い申し上げます次第であります。

計画概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会チョー・アウィ登山隊
HAJ CHO-AUI EXPEDITION IN
CHINA 1986.
(略称) HCE-86

2. 目標の山

中華人民共和国西藏自治区内
乔鳥衣峰(チョー・ウィ峰)
Mt. Cho-Aui(7,354 m)

3. 登山期間

1986年9月1日～11月7日(68日間)

4. 目 的

- 1) チョー・アウィ峰の初登頂
- 2) チベット文化及び地理的研究
- 3) 中華人民共和国青年層との交流・親善。

5. 主 催

日本ヒマラヤ協会

6. 後 援

(社)日中協会
 河北新報社
 宮城県山岳連盟

7. 隊の構成

隊長 八嶋 寛 連絡官 1名
 隊員 8名 通 訊 1名
 医師 1名 コック 1名

8. 留守本部

〒980 仙台市台原

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
 淀橋食糧ビル506号
 日本ヒマラヤ協会

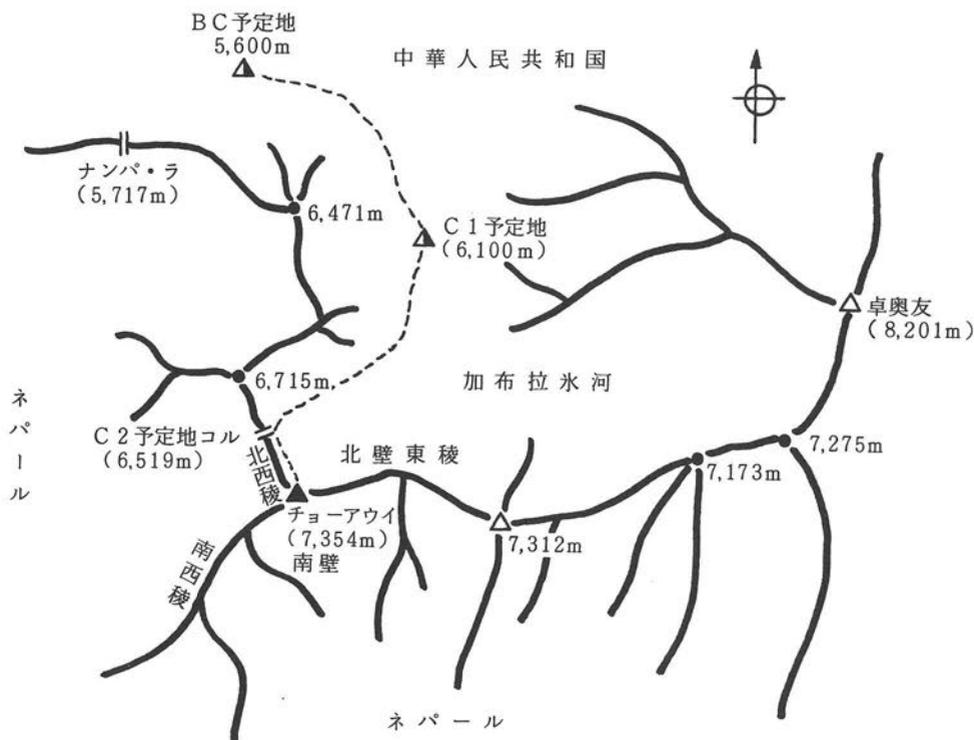
9. 現地連絡先

中人民共和國西藏自治区拉薩市沿河路
 中国西藏自治区登山協会

- 9月1日 成田発→北京着 (JAL-781)
 2日 北京滞在
 3日 北京→成都
 4日 成都→ラサ
 5日~6日 ラサ滞在 (隊荷整理)
 7日 ラサ→ランガーズ (by bus)
 (ランガーズで高所順応訓練)
 11日 ランガーズ→シガツェ (by bus)
 12日 シガツェ→カブラ (by bus)
 13日 カブラよりヤクによるキャラバン開始
 15日 B・C (約5,600m) 設営
 16日 } 登山期間 (41日間)
 10月26日 }
 27日 B・C撤収
 11月4日 ラサ→成都 (by Air)
 5日 成都→北京 (by Air)
 6日 北京滞在
 7日 北京→成田 (JAL-782)

日程概要

ルート概念図



隊員構成

①生年月日 ②所属クラブ
③勤務先 ④住所
⑤海外登山経験

隊長 八嶋 寛 (Yashima Hiroshi)

②仙台山岳会

②仙台山岳会

隊員 石川 啓二 (Ishikawa Keiji)

②仙台市役所山岳会

⑤1975年 アンナプルナ南峰 (7,199m)

1978年 ヌン (7,135m)

“ トリスル (7,120m)

1980年 カンチェンジュンガ偵察

1981年 ヤルン・カン (8,505m)

1985年 黄河源流探検

隊員 小野寺 光 義 (Onodera Mitsuyoshi)

隊員 山田 敏雄 (Yamada Toshio)

②東北学院大学山岳会

②ツェルト山岳会

隊員 志小田 美 弘 (Shikoda Yoshihiro)

隊員 佐藤 修 (Sato Osamu)

②東北学院大学山岳会

②仙台市役所山岳会

隊員 大久保 主 計 (Okubo Chikara)

⑤1981年 玉山 (3,997m)

1983年 ヒムルン・ヒマール (7,126m)

医師 松木 克 雄 (Matsuki Katsuo)

②東北学院大学山岳会

②仙合一高山の会・東北大長峻山の会

隊員 遠藤 幸 寿 (Endo Yukitoshi)

②仙台市役所山岳会

⑤1983年 ヒムルン・ヒマール (7,126m)

隊員 江村 克 志 (Emura Katsushi)

喬烏衣峰の概要

喬烏衣峰は、チベット自治区定日県とネパールの国境として連なるグレート・ヒマラヤの一角に位置し、世界最高峰のチョモランマ(8,848m)から西に約30km離れた北緯28°04'、東経86°37'の所に聳える。

古来、チベットとネパールの交易路とされてきた蘭巴山口(ナンパ・ラ)の東側に美しい三角錐の山容をもって聳え立つ喬烏衣峰は、昔から人々の目に触れてきたが、どちらかと云うと今日迄不遇をかこってきた。それは、その背後にチョー・オユー(卓奥友峰)と云う巨峰が隣接していたか

らであろう。

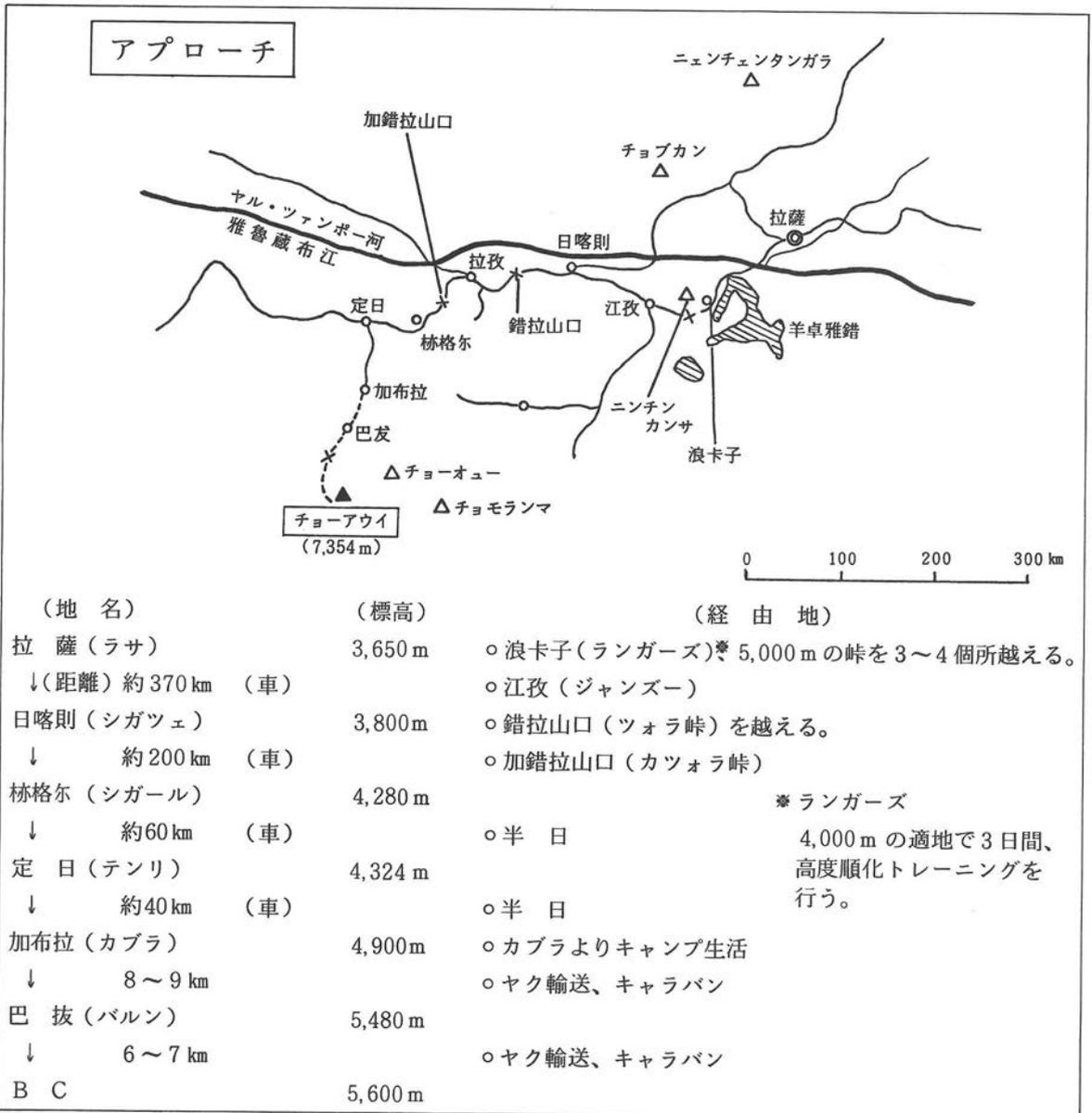
因に、1951年にネパール側からのエベレスト偵察を終えたE. シプトンの英国隊は、ゴジュンバ氷河を探った後、ポーテ・コシを遡ってナンパ・ラに立ったが、その中でシプトンは、「ポーテ・コシの東側には、8,200 mを越すチョー・オユーが聳え、西側には7,000 m近くの無名峰がひかえていた。…」と記しており、当時は名前すら無く、単なる無名峰として片づけられていたのである。

このようにチョー・オユーと云うジャイアンツのジャンダルムが如く見られてきた同峰も、今、残り少なくなってきた7,000 m級の未踏峰の中で

さんぜん
燦然と輝きをはなっている。

北面は、加布拉氷河(Jiabula Gl.)側に岩壁となって切れ落ち、南面は、蘭巴氷河(Nangpa Gl.)側に急峻なヒマラヤ壁をなしている。然し、ピークより派生する北西稜、南西稜、東稜は登山ルートとして選び易く、今回は加布拉氷河のBC予定地よりもっとも妥当なルートとして北西稜を登る計画である。

ネパール側からチョーアウィ(Cho-Aui)の名で親しまれてきた喬烏衣峰は、チベットの発音では、チョー・ウィー(Qo-Wuyi)と聞きとれる。



神領の峰へ

—KARJIANG 7,221 m—

HAJ佐賀中国西藏遠征計画

趣 旨

憧憬の地 — チベット — 、ネパール、インド、パキスタン、ブータンなどのヒマラヤ諸国と世界の屋根を狭んで隣接するチベットは、ヒマラヤニストならずとも、未知の世界にロマンを抱く人々にとって、魅惑を秘めたところであります。文明は常に、未知なる課題への勇気ある挑戦によって緊張し、発展してきたことは歴史の示すところであります。

此の度、私達が目指す未踏峰、カルジャン（カ熱疆峰、7,221 m）は、中国西藏領にあり、古都ラサより南へ300 kmの地点に位置します。ピラミダルなその山容は登攀意欲をそそられる美しい山であります。私達岳人にとって未踏への憧れは最高のロマンであり、人間の活動領域を拡大する社会的なパイオニアワークだと思っております。現在、地球上に残された7,000 m以上の未踏峰は相次ぐ果敢な挑戦により、10余座を残すのみとなりました。

然し、これらの未踏峰もここ数年の間には全て登りつくされることでしょう。私達はこの最後の輝きとも云える玉峰に挑むことの出来る事を幸せに思うものです。まして、佐賀の地にあって各国の登山隊が注目している未踏の山だけに非常に幸運と云えます。それだけに今回の西藏遠征を一期一会のものとして珠玉のごとく大切にし、充実し

た生涯に残るような時とすべく決意しております。そして、この遠征を通じて私達はこれ迄より、ひと回り大きな人間に成長するように努力したいと考えております。

私達は本遠征の実施にあたり、最少投資、最大効果を基本としておりますが、目的完遂のためには膨大な人間のエネルギーと共に多量の物資を必要としております。

私達は、組織を挙げて可能な限りの努力を尽くしますが、多くの方々の御支援がなければ到底成しえるものではありません。総力を傾注して推進いたしますので、おおかたの温かい御援助を切にお願い申し上げます。

計 画 概 要

1. 隊の名称

HAJ 佐賀中国西藏遠征隊
HAJ SAGA TIBET EXPEDITION
IN CHINA 1986
(略称) HSTE-86

2. 目標の山

中華人民共和国西藏自治区内
カ熱疆峰（カルジャン峰）
Mt. Karjiang (7,221 m)

3. 登山期間

1986年9月1日～11月2日（63日間）

4. 目 的

- 1) カルジャン峰の初登頂。
- 2) 中国登山界との親善交流。

5. 主催

佐賀ロッククライミングクラブ
 SAGA ROCK CLIMBING CLUB (SRCC)
 日本ヒマラヤ協会
 THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

6. 後援

(社)日中協会
 佐賀新聞社
 佐賀県山岳連盟

7. 隊の構成

隊長 新郷信廣
 隊員 5名 連絡官 1名
 隊員 1名 コック 1名(計9名)

8. 留守本部

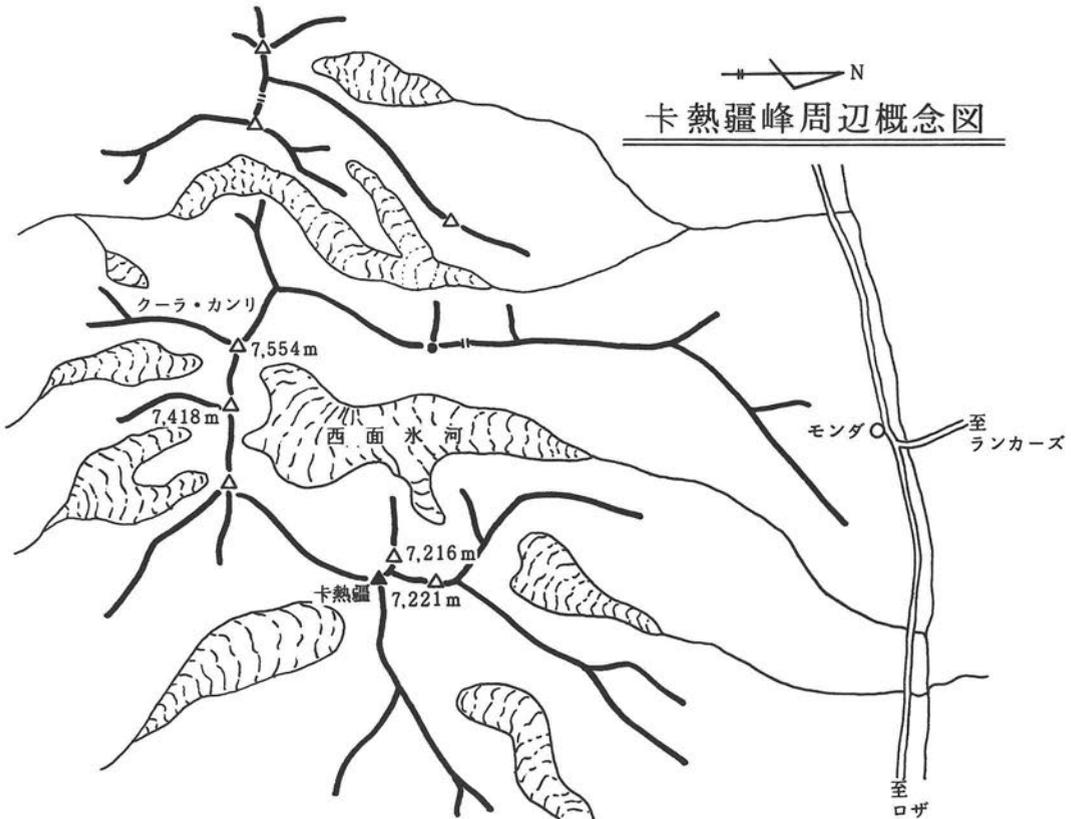
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
 淀橋食糧ビル506号
 日本ヒマラヤ協会

9. 現地連絡先

中華人民共和國西藏自治区拉薩市沿河路
 中国西藏自治区登山協会
 ☎ 22981

日程概要

- 9月1日 大阪発 → 北京 (JAL-785)
 2日 北京滞在
 3日 北京→成都 (by Air)
 4日 成都→ラサ (by Air)
 5日～7日 ラサ滞在 (準備、高所馴応)
 8日 ラサ→蒙達 (モンダ) (by bus)
 9日 蒙達→BC
 10日 }
 { 登山期間 (43日間)
 10月22日 }
 23日 BC→蒙達
 24日 蒙達→日喀則滞在
 25日 日喀則滞在
 26日 日喀則→ラサ
 27日～29日 ラサ滞在 (隊荷整理)



30日 ラサ→成都 (by Air)

31日 成都滞在

11月1日 成都→北京 (by Air)

2日 北京→大阪 (JAL-782)

隊員構成	①生年月日	②所属クラブ
	③勤務先	④住所
	⑤海外登山経験	

隊長 新郷 信 廣 (Shingo Nobuhiro)

⑤1975年 ヌン (7,135 m)

1981年 カンチェンジュンガ (8,598 m)

1983年 ヌン (7,135 m)

隊員 岩崎 洋 (Iwazaki Hiroshi)

②佐賀RCC

②アスペン・クラブ

⑤1978年 マッキンリー (6,194 m)

1980年 ケダルナート・ドーム (6,831 m)

1981年 ナンダ・カート (6,611 m)

1982年 冬期マナスル (8,163 m)

1983年 バルテクンタ (6,578 m)

1984年 マモストーン・カンリ (7,526 m)

副隊長 友田 健 治 (Tomoda Kenji)

⑤1984年 マモストーン・カンリ (7,526 m)

隊員 綾戸 新 二 (Ayado Shinji)

②佐賀RCC

③佐賀大学学生

②佐賀RCC

カルジャン峰の概要

「天帝の峰」と云われる秘峰、クーラ・カンリは、チベットの首都ラサから約300km南下した位置に横たわり、その南には雷龍の国・ブータンの山々が重畳と連なる。

1900年代のはじめにイギリス人のC・ホワイトらによって発見されたこの山群は、1922年にベイリー、ミードらによって測量されたが、其の後は長い間門戸が閉ざされたままとなり、ひっそりと不遇をかこってきた。1985年になって漸くこの山群もオープンされ、この年の秋、神戸大学隊が偵察に入り、翌春、「天帝の峰」は、その頂を人類に明け渡した。

クーラ・カンリ山群は、ブータンの国境綾線越しに遠望すると顕著な三つの峰からなり、最高峰のI峰 (7,554 m) は、ブータン・ヒマラヤ山群の盟主として長い間、ブータン領の山として思われてきた。然し、現在では、ブータン王国の最高峰はガンケル・プンスム (7,541 m) とされており、これらの山々が聳える国境綾線とクーラ・カンリ山群はクル・チューを挟んで対峙しており、クーラ・カンリ山群は完全にチベット領として画

⑤1983年 バルテクンタ (6,578 m)

登攀隊長 宮崎 勉 (Miyazaki Tsutomu)

②群馬ミヤマ山岳会

⑤1975年 ダウラギリIV (7,661 m)

1978年 ダウラギリI (8,167 m)

1982年 ダウラギリI (8,167 m)

1982年 冬期エベレスト (8,848 m)

1983年 ローツェ (8,516 m)

1983年 冬期エベレスト (8,848 m)

1984年 冬期アンナプルナ (8,091 m)

1985年 エベレスト (8,848 m)

隊員 保坂 昭 憲 (Hosaka Akinori)

②福島県こまくさ山岳会

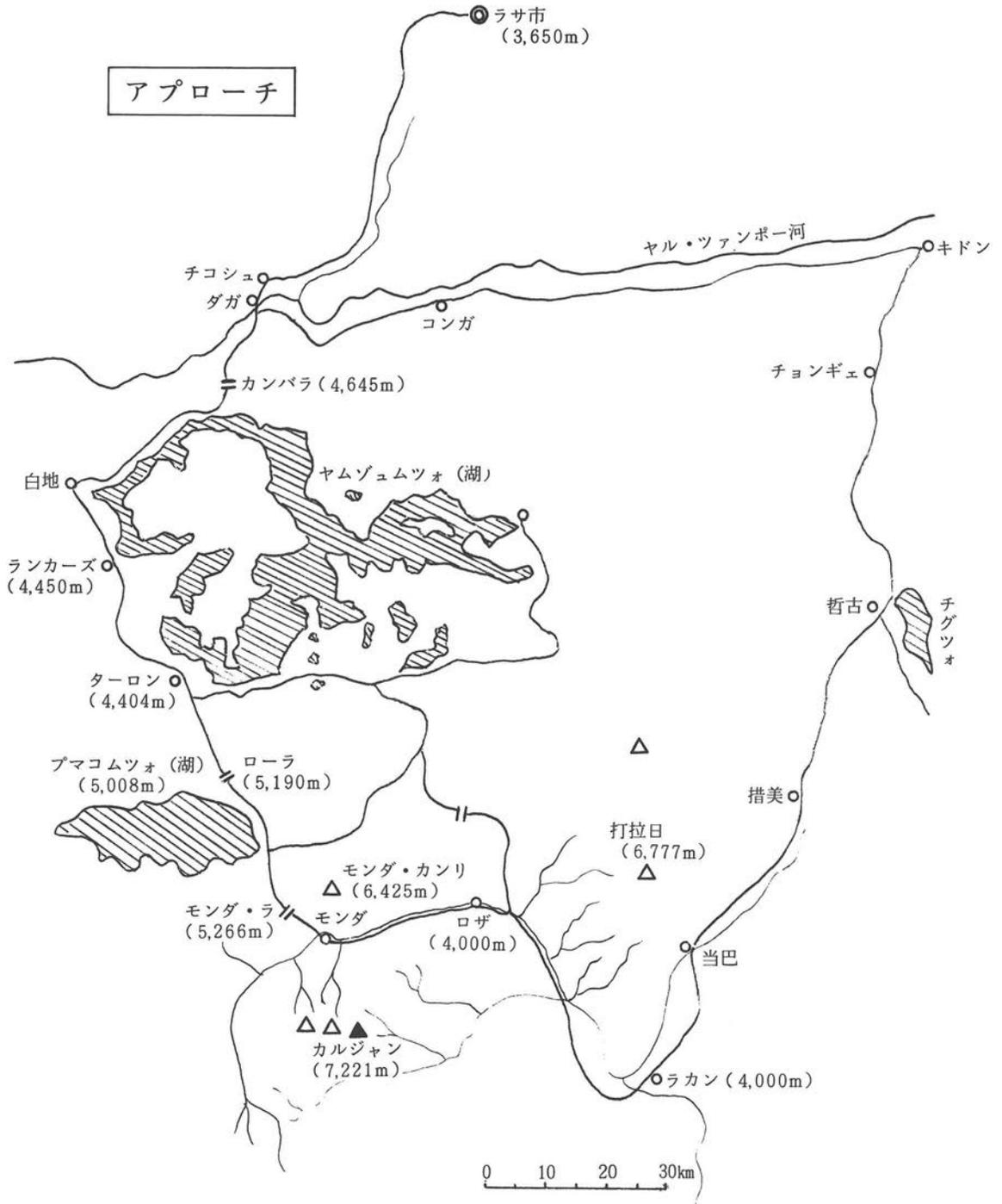
定されている。

カルジャンは、クーラ・カンリ山群第2の高峰で、そのピラミダルな山容は、正に「神領の峰」の名に相応しい。

アプローチは、ラサから車でヤル・ツァンボ河

を渡り、ランカーズに向う。ランカーズから標高5,190mのローラ、5,266mのモンダ・ラの高い関嶺を経てチベット人の集落地モンダに着く。

モンダからはヤクや馬を使い、熱疆峰の西面氷河上にBCを建設する予定である。



加拉白里登山計画

—GYALA-PERI 7,151 m—

趣 旨

日本ヒマラヤ協会は、1967年の創立以来、高地アジアの山々を対象に連続的な登山と調査・研究活動を実践しながらこの分野をリードし、その発展に尽力してまいりました。

このたび、私達は地球上に残された最後の輝きとも云うべき、東チベットのヤル・ツァンポー河大湾曲部に聳える未踏の高峰、加拉白里峰（ギャラ・ペリ、7,151 m）に登山隊を派遣することになりました。

チベット西部の聖地・カイラス山の麓付近に源を発したヤル・ツァンポー河は、チベット高原を東流し、やがてチベットの東で突然流れを南西に転じる大湾曲部を成し、その名をブラマプトラ河と変えてインドのアッサム平原へと流れ落ち、さらにこの悠久なる流れはバングラディッシュを通過してベンガル湾へと注いでおります。

1913年にこの地を訪れた F. M. ベイリーは、その書「ヒマラヤの謎の河」の中で、—ヤル・ツァンポー河は世界で最も山岳重畳とした困難で荒涼たる地帯を縫って、南チベットの最も開けた地方を抜けて真東に流れている。—と記しております。この河も今や「謎の河」ではなくなりましたが、大湾曲部だけは依然として「謎」のままです。この大湾曲部にツァンポーの大河を挟んで二つの垂涎の高峰が対峙しております。南にナムチ

ャ・バルワ、北にギャラ・ペリの玉峰がそうです。ナムチャ・バルワは既に中国隊が二度にわたり登頂を試みましたが、未だその頂は明け渡されておりません。そして、もう一方のギャラ・ペリは、試登はおろか写真すら殆ど無いまま深いベールに覆われてきた秘峰であります。

本会では、長年にわたる中国登山協会及び西藏登山協会との継続折衝の結果、この秘峰の登山許可を取得することができました。本会では、今年の本隊派遣を前に昨秋、2名の偵察隊を派遣し、同峰の西面側をつぶさに偵察してまいりました。本隊では、偵察結果をもとに南西面から攻略する計画であります。

地球上に残された7,000 m 台の未踏峰も数少なくなつた現在、この好機を最大限に活用して、目標とするギャラ・ペリ峰のみならず自然科学、人文科学上深い興味もたれるこの地域について様々な成果をもたらす所存であります。

何卒、本登山隊の趣旨を御理解の上、皆様の絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

計 画 概 要

1. 隊の名称

HAJ チベット（ギャラ・ペリ峰）登山隊
HAJ Mt. GYALA-PERI(XIZANG) Exp.1986
（略称） HGE-86

2. 目標の山

中華人民共和国西藏自治区内
加拉白里峰（ギャラ・ペリ峰）
Mt. Gyala Peri (7,151m)

3. 登山期間

1986年9月1日～11月21日（82日間）

4. 目的

- 1) ギャラ・ペリ峰の初登頂
- 2) ヤル・ツァンポー河大湾曲部の探検調査
- 3) 中国登山界との親善交流

5. 主催

日本ヒマラヤ協会

6. 後援

(社)日中協会

7. 隊の構成

隊長 飛田和夫

隊員 5名 連絡官 1名

通訳 1名 コック 1名(計9名)

8. 留守本部

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会

9. 現地連絡先

中華人民共和国西藏自治区拉薩市沿河路

中国西藏自治区登山協会

☎ 22981

日程概要

9月1日 成田発→北京着（JAL-781）

2日 北京滞在

3日 北京→成都（by Air）

4日 成都→ラサ（by Air）

5日～7日 ラサ滞在（隊荷整理）

8日 ラサ→八一鎮（by ジープ、トラック）

9日 八一鎮→ペ（by ジープ、トラック）

10日～13日 ペ滞在（ヤル・ツァンポー河の
隊荷渡し）

14日 ティンベ→チュベ

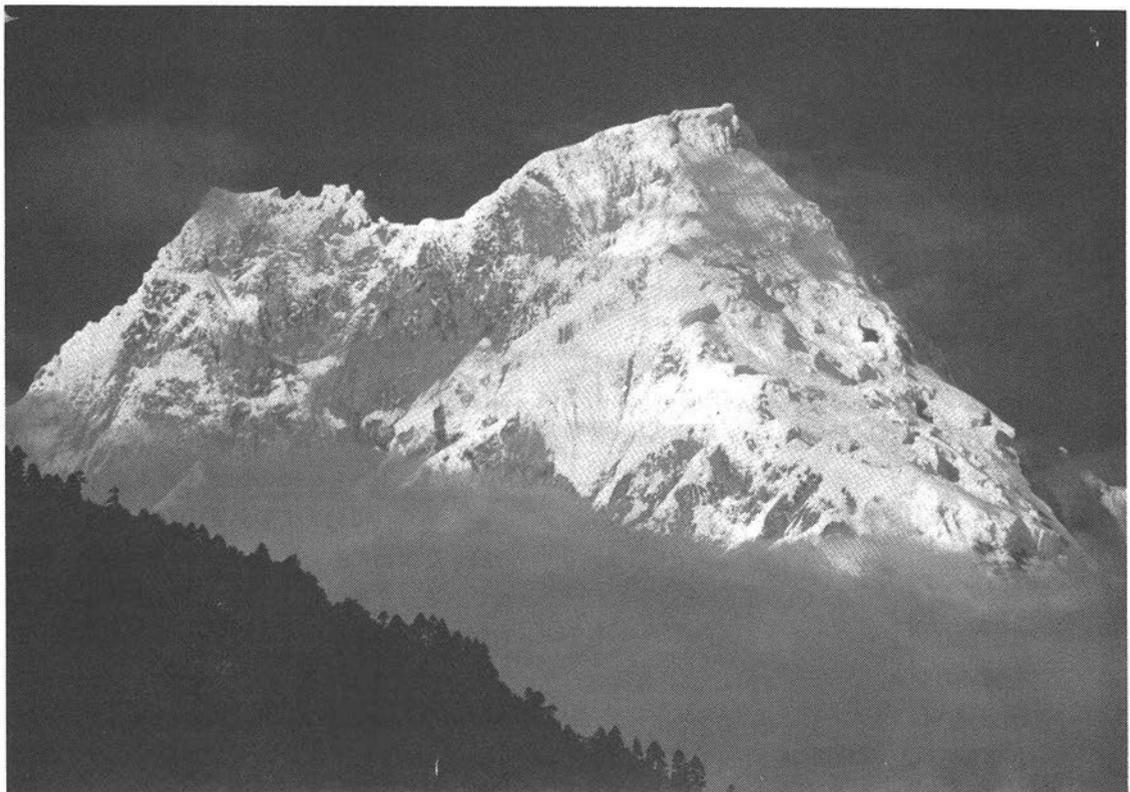
15日 チュベ→ギャラ対岸

18日 BC建設

20日

} 登山期間（45日間）

11月3日



▲西面からのギャラ・ペリ（7,151m）

6日 BC撤収、帰路キャラバン開始
 14日 八一鎮帰着
 15日 八一鎮→ラサ着
 18日 ラサ→成都 (by Air)
 20日 成都→北京 (by Air)
 21日 北京→成田 (JAL-782)

隊員構成

①生年月日	②所属クラブ
③勤務先	④住所
⑤海外登山経験	

隊長 飛田和夫 (Tobita Kazuo)

②国鉄関東山岳連盟

⑤1976年 カラコルム偵察
 1978年 トリスル (7,120m)
 1981年 ヤルン・カン (8,505m)
 1983年 韓国・雪岳山
 1983年 ヌン (7,135m)
 1984年 中国・玉龍雪山 (5,596m)
 1985年 K₂ (8,611m)
 1986年 ゴーキョ・ピーク

登攀隊長 尾形好雄 (Ogata Yoshio)

②雪と岩の会

⑤1974年 ツクチェ・ピーク (6,920m)
 1978年 ヒマルチュリ (7,893m)
 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m)
 1981年 ヤル・カン (8,505m)
 1981年 ナンダ・カート (6,611m)
 1983年 ナンダ・カート (6,611m)
 1984年 マモストーン・カンリ (7,526m)
 1985年 ガンケル・プンスム (7,541m)

隊員 太田健 (Ota Takeshi)

②風の谷同人

⑤1982年 インド・CB9 (6,108m)
 隊員 橋本康弘 (Hashimoto Yasuhiro)

②東京徒歩山溪会

⑤1980年 ヨーロッパ・アルプス
 1985年 中国・クラウン (7,295m)

隊員 今村裕隆 (Imamura Hiroataka)

②ベルニナ山岳会

⑤1982年 中国・チョゴリ (8,611m)
 1983年 マカルー (8,463m)
 1984年 マッキンリー (6,194m)
 隊員 藤原拓夫 (Fujiwara Takuo)

②G登攀クラブ

⑤1984年 ヨーロッパ・アルプス

加拉白里峰の概要

加拉白里峰は、ラサの東京約375kmの北緯29°49′、東経94°59′の所に位置する。

「謎の河」として知られるヤル・ツァンポー河の探検踏査にこの地を訪れたF. M. ベイリーは、加拉白里峰を望見した時の模様を次のように書き記している。

「ミピの下から、その匹敵者ナムチャ・バルワに半ばかくれて見えていた雪のピークは、今、その威容を眼前にあらわした。ギャラ・ペリ、7,151mである。この山自体、世界の巨峰であることはもちろんであるが、さらに驚くべきことは、ナムチャ・バルワ、7,756mとの距離はわずか20.8キロであり、ツァンポー河は両者の間、ギャラ・ペリより4,267m下、ナムチャ・バルワより4,877m下を流れているという事実であった。これはグ

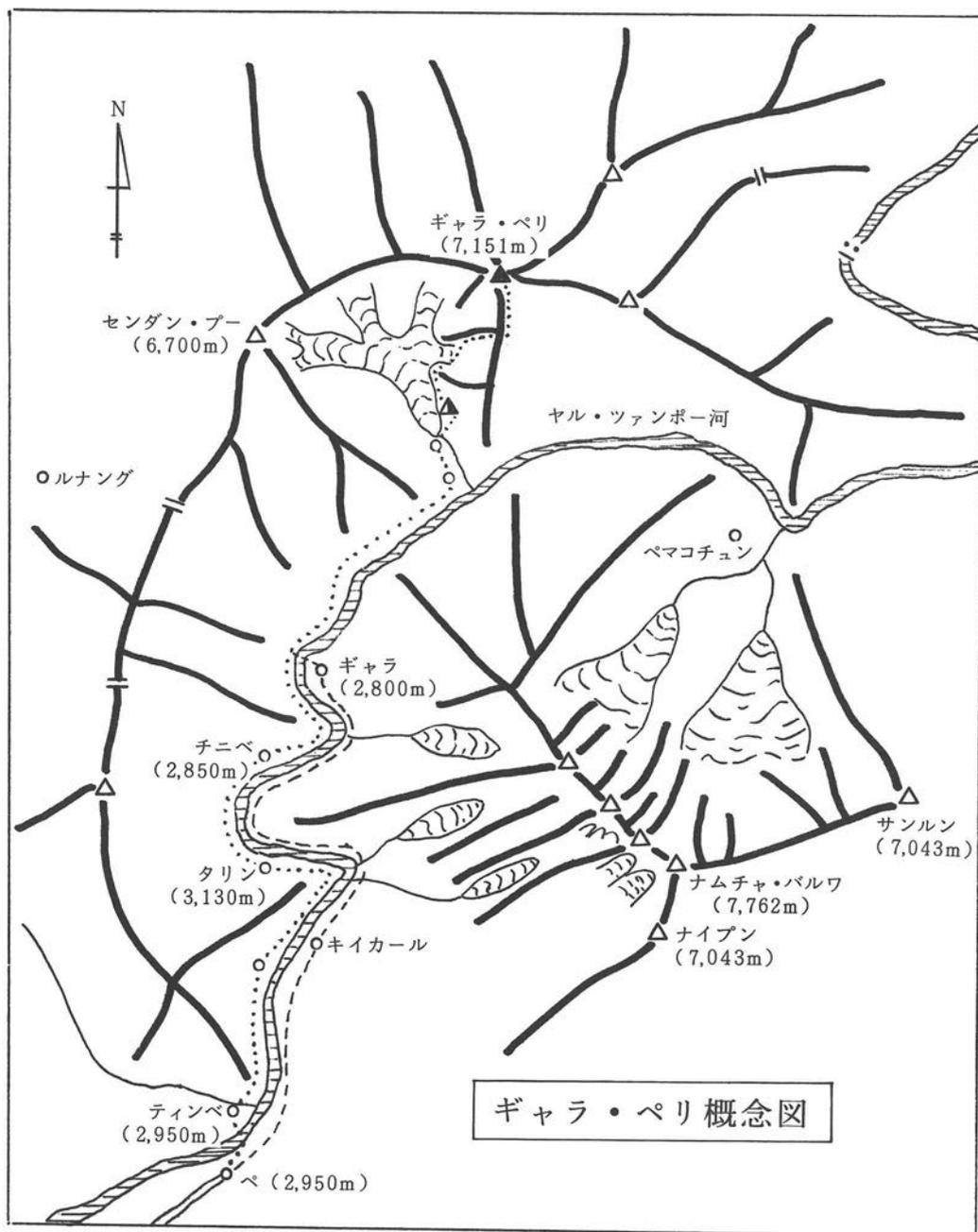
ランド・キャニオンにおけるコロラド川のように、驚くべき水の力を示すものといえよう。」

このツェンポー大湾曲部側からの加拉白里峰は主峰と西峰からなる双耳峰として眺められる。

主峰南稜と加拉白里峰の西に聳えるセンダンブー(6,700m)南東稜の間には、ギャラ・ペリ氷河が食い入り、この氷河の上部に立ちはだかる主峰

南稜と西峰にかけての西壁は、傾斜の強い圧倒的な岩壁層を形造っている。

今、本隊の計画は、昨秋の偵察隊の報告から、北面、東面のルートはアプローチに於けるトランスポートの問題があって難しいようなので、この西壁から主峰南稜上に突き上げる稜にルートを取る予定である。



■ 寸 感 ■

9月からの遠征を控え何かと慌ただしい中、外国から旧知の山岳関係者が相次いで来日し、旧盆以降でんてこ舞させられた。

9月1日にHAJのチベット遠征隊が4隊出発します。小生もその一員として参加しますので、留守中宜しくお願いします。(尾形)

事 務 局 日 誌 (8月)

- 3日(日) キンナウル隊出発(成田見送り、尾形)
- 11日(月) CMA代表団(史占春団長他2名)来日(成田出迎え、山森、尾形、鈴木)
ヒマラヤNo.178 発送
- 12日(火) CMA代表団との協議及び歓迎会
- 20日(水)～21日(木) 国際アルピニスト・シンポジウムに尾形常務理事出席(松本市)
- 21日(木) 雪宝頂登山隊帰国

- 23日(土) IMF副総裁のM・S・コーリー氏と懇談(稲田、尾形、吉田)
- 25日(月) N・D・ジャイル氏(IMF)と懇談(尾形)
東京集会(24名)
- 26日(火) NMA代表団(クマール殿下他2名)歓迎会
- 27日(水) CMA代表団帰国(成田見送り、山森)
- 29日(金) 山森事務局長訪中

ヒマラヤ No.179 (10月号)

昭和61年9月10日印刷 61年10月1日発行

発行人 柴田金之助

編集人 尾形好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

ヒマラヤへのステップ

エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、

ソ連(中央アジア)へ遠征、

トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキング用山岳保険加入に至るまで適切なトータルアドバイス、手配を受けたいまわります。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

世界山岳旅行クラブ
運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号
住友海上火災登山トレッキング保険代理店

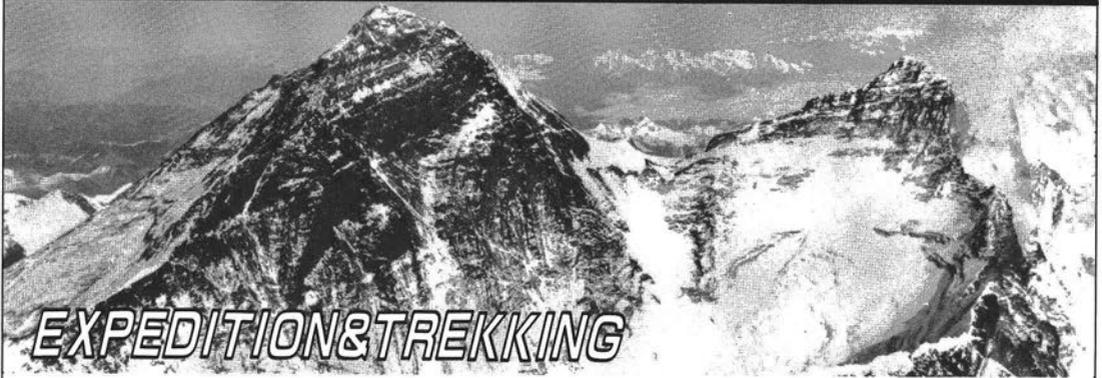
(株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原

主催：(株)ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当・佐藤 (一般登録第332号/取扱主任者・伊藤園子)



TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰 ウルタル山

遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

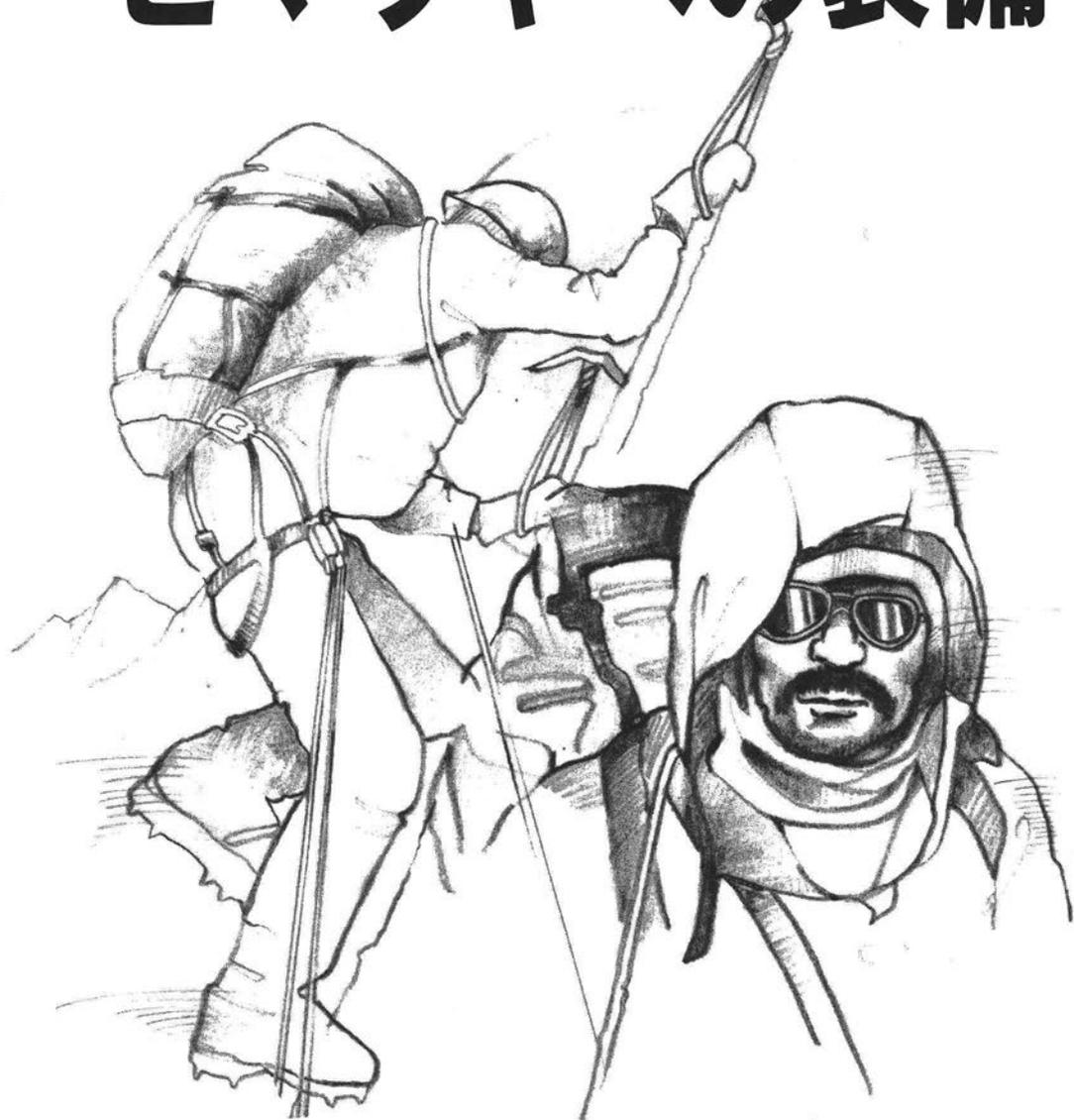
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎216338
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(436)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番町107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外高部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004